

# 西桜幼稚園 研究集會報告

(32.2.8~9)

樋口澄雄

## 一、この研究集會の趣旨

研究会をどのように持ったらいいかについては、さまざまのことが考えられると思います。が、何とかして、自分たちの力で、同志によびかけあつての、いわゆる下からのよりあがりとしての研究会を持ちたいものだ、私たちはひそかな、そして年来の希望を持っていました。

頼まれるのでもなく、すすめられるのでもなく、自発的にやる。こんな態勢を作り

あげていくことが、私たちの任務のような気がします。

そのことは次のような案内状になったのです。

「新教育が発足してから十三年目になります、早いものです。

しかし最近、その第二段階を示す様相がしばしば見受けられるようになってきました。

このとき、教育のことを思う、みなさまと相会して、これからさきのことなど語りあつて、はげましあつたらどんなにうれしいことかと思つていました。

そこで意を決して、ささやかではあります、私どもの学校のしごとを素材に提供して、そうしたときとところを持つてはと考えました。

おいそがしいときです。寒さもきつい頂上ですが、何卒私どもの意をおくみとり下さいまして、新しい教育の進展のため、みなさま誘い合せ、一人でも多く、この広場にお出かけ下さいますよう、心からお待ち申します。」

私たちは、今もこの考えを捨てていないのですが、何とかして、私たちの受けもつ

子どもを少しでもよく伸ばして幸福にしてやるために、私たちの力の結果を私たちの力の及ぶかぎりで行つてみたいものだと思います。

私たちは、うえられた鉢のばらより、土手に萌え出るふきのとうに大きな魅力と、そして、根づよい力を発見するからです。

## 二、おみせしたこと

二月八日(金)九日(土)の二日間。朝九時から五十分間授業をいたしました。

松、竹、梅の三学級は乗り物ごっこ。梅組だけは初日に冬のあそびという音楽リズム、二日目は他と同様の乗り物ごっこでした。

単元は、乗り物あそびで、どの学級もちようどそれにはいつていましたので、乗り物ごっこを中心に展開したわけです。

題目は同じようでしたが、中味はそれぞれが違った角度でした。というのは、私たちの園では、共通の単元は持ちますが、展開は各自創意をもつて、学級に合うように行うことを本体にしているからです。

この部分の紹介が、十分でないことは残念ですが、主として行われたことは、子どもたちの創意と自発活動を重んじて、あ

る学級は大型の積木で部屋いっぱい、の乗り物を、ある学級は木工などで作った乗り物を、またある学級は既成の動く乗り物を使ってというように、いろいろの角度で展開しました。これは作爲でなく、学級の展開の流れにそったものでした。

そして、私たちは、果してこういうことでよいかを研究の一つのメドにもしてもらいたかったのです。というのは、展開のぬらいさえ共通なら、展開されることは、学級によって、かわってさしつかえないと思っているからです。画一的な考え方を打ち破って、学級教師が思う存分動けるようにするところに教育の創造的發展があると考えているからです。

### 三、提案とその考えの源（提案者 塚家 文）

私たちは、分科会を三時間に亘って持ったのですが、それは、集った方々がみなさん十分思う存分にいつくしたい念願からだったのです。

そこで、この分科会への提案に何を持ってくるかについて考えました。

第一は授業それ自身より、その底に流れている考え方、それを問題に出したらと考えました。

第二には、幼稚園段階においてのいちばん強くねらわなければならない問題点を明確に出して、それを真正面からとりあげようという態度をとりました。

第三には、少々むずかしくても、理論的に追求することによって、幼稚園教育の骨ぐみに一歩でも前進できる問題をとりあげて、いこうとしました。

そこで提案となった問題は、「幼稚園で、社会集団の意識と行動をもちあげていくのには、どのようにしたらよいか」というものでした。

提案の理由は次のような考えにもとづいているのです。

私たちは、幼稚園教育を、家庭教育の延長とは考えておりません。家庭生活に基盤をおく子どもたちを教育することにまちはありませんが、園という集団生活による教育場が幼稚園だと思っているのです。家庭の母親のすることを園が肩がわりしてやるものだと思いません。そうした部分は当然はいってやることですが、主旨はそうしたものでないと思っています。このあたりが、保育園とのちがいの根本だと思っています。また初期の幼稚園とのちが

いもこの辺にあるのだと思っています。それで、幼稚園の基本的なねらいはどこにおいたらよいかということになります。

私たちは、こう考えるのです。園という集団によって、子ども一人ひとりがその集団の中に正しく位置づけられて、社会的に目が開け、その社会集団の中で他人との関係を意識して、その上に立って、自己を発見していくことだと思えます。

もちろんその自己発見という中味は領域にわかれて考えられます。いわゆる六領域に亘るさまざまな教材は、この自己発見のために提供されるのだと思えます。しかし、どこまでもこの自己発見は、集団の中で、集団を意識においてなされなければ、幼稚園の意味がないと思うのです。

こんなことを考慮において現在の幼稚園教育を考えますと、この集団の意識を育てることにもっと関心をもって研究を進めていく必要があると思いました。そこでこの問題を真正面からとりあげることにしたのであります。

家庭での生活では、子どもたちは、家族内乃至近い親戚および近所の友だちといっただく限られた狭い範囲の交友関係しかあ

りません。またそのふれ合う内面的な関係は、家族を除いては、ごく浅いものといわなければなりません。その上、この頃の子どもの発達程度を考慮してみますと、まだ社会的に目が開けず自己中心でものをみる頃だと思えます。したがって、園にはいつてまいりましても心は各自の家族の最も深いつながりを持つ人たちに強く結ばれていて、園の社会集団の中に自分をたしかかな位置づけをしていないと思えます。

ここに幼稚園教育の大きなねらいの穴が見えるように思います。

このことについて私たちは次のように表現いたしました。「入園当初の群的あり方から、しだいに集団的な考え方や行動までに引きあげていきたい」と。

で、この群から集団へと高めたいという考え方が、社会集団の意識と行動といった意味なのです。

すなわち、家庭人につながる自己中心的な子どもたちが、園という集り、学級という集りの中にはいつてきてても、その意識も行動も「むれ」的であるとみているのです。

個々ばらばらの考えに立っているときは、多ぜいの人が集っていても、それは単

なる集合体で「群」とよぶべきものだと思うのです。同じ目的地にいくために同じ電車にのり合せても、その中の乗客は「群」でありませぬ。

同じ目的で幼稚園にはいつてきてても、その個々の子どもたちの関係は、実は群なのです。

これを、教育の方で「集団」にまで高めていきたい、それこそが幼稚園教育の中心的ねらいではないだろうか、というのが私たちの提案の趣旨なのです。

私たちは、この提案の裏づけとして、具体的な案を示しました。それは、年間の単元系列を主体にしたカリキュラムです。

私たちは、幼稚園過程においても、生活暦に合せた小さな題材による学習のまとまりを考えるばかりでなく、やや大型のねらいをはっきりもった、単元をおくべきだと考えています。年間六つおいたのですが、それくらいはいいのではないかと考えているのです。

もちろんこの提案主題である、社会集団の意識と行動のよりあげに對する学級での教育は、単元のみでは不可能です。全ての場において、また小型の単元（私たちは題材とよんでいます）で十分考えていくので

すが、およそ、この単元を配置した頃がその発達程度を示す基準になるように、またその単元自体がそれをねらうように考えました。

つぎに、単元について解説を試みましよう。

1、ままごと（六月）まだ群的性格を多分に持っていますが、全級的にしかも意識して一つの遊びを持つようになる。

と同時に部分的ではあるが、何人かの共同遊びをさせようとしています。

2、魚つり遊び（九月）各個人が作った魚を持ちよって共同の場で、共同で遊ぶところにもって持っていつて、学級がつながりを持つ集団であるという意識を、しごとを通して深めようというのです。

3、動物遊び（十月）グループによる共同製作を動物園にみいくという目的活動と連関して行い、さらにその共同作品を全体的視野に立つてみるようにしています。そして、ここでは、グループの深い結びつきの意味とグループ同志のつながりにはいつてきりと目ざめさせ、学級の集団意識をよりあげようというのです。

4、お店やさん（十一月）

5、郵便あそび（二月）

6、乗り物あそび(二月)この一連のものは、幼稚園における社会観察の主流をなすものとして考えた上に、集団意識や行動の点からみますと、知識的には内容自体の持つ社会的なものの認識が高まり、子ども同志の社会性という点からは、集団の結びつき、すなわち、個々の個人が友人と結びつくことによって、その個々の個人の生活が高まっていくこと、また集団による結びつきによってこそより高い程度の学習のできることなど集団の意識の向上を作業を通して、わからせようとしているのです。このあたりで、幼稚園段階におけるの社会性のしあげをしていこうとしているわけです。

このように、私たちは、年間の教育計画の中でこの問題を考えてまいりましたのでこれも提案の裏づけとして発表しました。なお、具体的な研究として、その集団意識に高めるための具体的場であるグループのことにもふれました。

そして、それは、グループ内での子どもの意識の動きを、こまかく透徹した目で見通していくことが大切であることを申し上げたのでした。

#### 四、話しあわされたこと

(分科会司会者 小山田幾子  
パネル討議出席者 山村きよ)

最近まれにみる、といった熱心な討議が行われました。社会集団の意識や行動というような打ち出し方は、むずかしいではないかということからはじまって、グループの見方の問題に中心がおかれ、お互いの体験談を中心に具体的に論議されました。

そして結論としては、この問題は、どうしてもねづよく、具体的な場で実践していかなければならないということが確認されました。

また単元の設定については、異論もありましたが、幼稚園段階でも、どうしてもこ

### △南山幼稚園▽

## 放送教育

(三三・二・二二)

小山田幾子

子どもたちが、幼稚園という集団生活の場で、みんなで、静かに、たのしい音楽や、お話や劇などを見たり、聞いたりする態度をやしなひ、人間としての基礎が培わ

うしたカリキュラムをおいて考えないと、しっかりした教育になっていけないだろう、その日、その日を無事におえればよいといったことでは、いけないのではないかという話になりました。

#### 五、あとで考えたこと

少し理くつっぽい研究会にはなりませんが、私たちが、幼稚園教育で考えなければならぬことは、もつと背骨になることに関心を持ち、筋の通った研究を重ねていきたいということでした。理論のある実践活動こそ本ものの教育を築いていくからだと思います。(筆者は現済美幼稚園長)

れるといわれるこの時代に、いろいろの角度から種々の生活経験をさせ、情緒を豊かにすることは、非常に大切なことであり、その必要は、いまさらいうまでもないこと